●連載講座　第５回●

江戸時代の消防事情⑤

元東京消防庁
消防博物館長　白　井　和　雄

○ 浮世絵師初代安藤広重は、定火消同心だった

安藤広重と聞くと殆どの人は、かの有名な浮世絵「東海道五拾三次」を思い浮かべる人が多いのでは。

広重の名は５代続いていて、そのうち初代と２代目は「定火消同心」の家に生まれ、初代は一時期父親の後を継いで、「定火消同心」を勤めたことがある。

５人の広重のうち３人は、風俗画・風景画・名所絵・開化絵のほか、「江戸消防絵巻」や「江戸消防錦絵」などを残している。

これら５人の安藤広重の「画業」と「定火消」について紹介する。

1　定火消

(1)定火消の創設

明暦３年(1657)１月18日に発生した「明暦の大火」は、当時の江戸の町の大半を焼き尽し、107,000人余の死者を出した他、江戸城の本丸や二の丸に火がかかり、天守閣は炎上し焼失した。

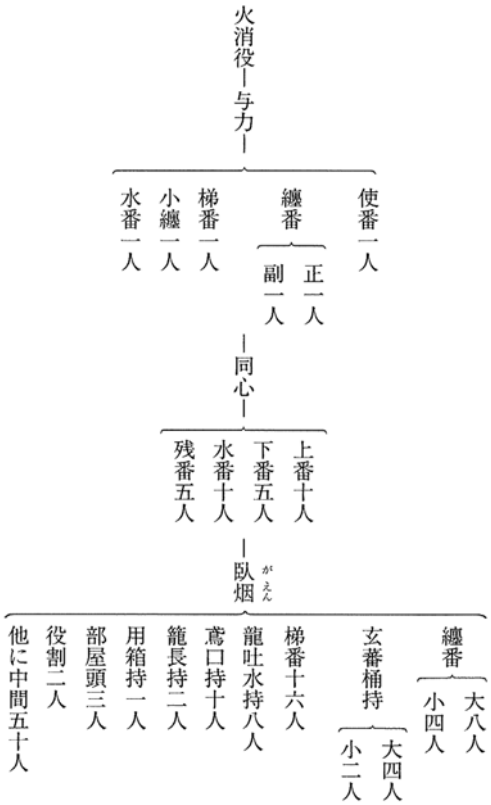
幕府はこれらのことを契機に、明暦の大火の翌年万治元年(1658)９月８日、江戸城の防火を目的として、幕府直属の4,000石以上の旗本をもって「定火消」を創設した。

定火消の指揮者は、知行4,000石以上の火消役を以って当て、火消役は平素消防に従事することを任務としていたが、一旦緩急あるときは、配下の与力・同心を率いて、小姓組(将軍の護衛武官)の背後に付いて戦いに加わり、戦場における装束は、火事装束を用いることとしていた。

与力・同心のもとにあって、直接消火活動に当がえんたるものを「臥煙」と呼んでいた。

(2)定火消の組織

定火消の組織は、次のようであった。



(3)火消屋敷の設置位置

定火消の屯所である火消屋敷は、江戸城を火災から護るため、江戸城を中心に外周を取り囲むように配置されていた。

定火消は創設当初は4組であったが、その後幾多の改変を経て、宝永元年(1704)には「10組」となったことから、「定火消」のことを「10人屋敷」とか、「10人火消」とも呼んでいた。

次は火消屋敷の名称と、設置位置(およそ現在の場所。)

・小川町屋敷(一ッ橋通り錦町東側)
・飯田町屋敷(富士見小学校辺り)
・御茶之水屋敷(順天堂大学病院辺り)
・赤坂御門外屋敷（赤坂豊川稲荷あたり）
・市ヶ谷御門外屋敷(長延寺門前辺り)
・駿河台屋敷(ニコライ堂辺り)
・四谷御門内屋敷(番町小学校辺り)
・八代洲河岸屋敷(元明治生命本館辺り)
・半蔵御門外屋敷(FM東京辺り)
・赤坂溜池屋敷(アメリカ大使館辺り)

(4)火消役の出場風景

火消役の出場風景を、明治31年(1898)12月に発刊された『風俗画報臨時増刊・江戸の花上編』は、次のように記している。

「毎夜主人の寝に就くや豫め火装頭巾(所謂火事頭巾なり。或は陣笠を用ゆ。)侃刀其他の要品を揃へ、其枕邊に備ふ。火の見櫓より鈴報一回達するや、等しく起て糧装を加ふ。

近侍伍卒の類其間に行装し、纏持先づ突出し、主人騎して之に亞ぎ、高張提灯敷封、楷子、龍吐水、指俣、玄蕃桶、鳶口其他輜重物持の類、皆追跡して之に纏ぐ。

其出馬の迅速なる事、感ずるに餘りあり。途上亦疾風の如く、火場に先登して互いに功を競ふものゝ如し。此の時主人の扮装は、火事羽織兜頭巾の鍔を翻へし、馬を躍らせ乗出す。白たゝき鞘の鎗は、此役の印なり。

與力馬上、同心の面ゝは、鼠地白ふすべ出しの相印皮羽織、組鍔頭巾に面を被ひ、箇々に鍵おっとり火に向ひ、與力は水の手階子の懸引、火の手風の手、變に應して進退し、主人は隊を励まし、必死を蓋させ、其様戦場の働を見る如し。」

2　浮世絵師安藤広重

(1)初代安藤広重

初代安藤広重は、葛飾北斉、喜多川歌麿、東洲斎写楽ともに、浮世絵の世界的巨匠とし高く評価されている。

初代広重は寛政9年(1797)、八代洲河岸(皇居馬場先門の堀端に面した、元明治生命本館ビルあたり)に設けられていた、定火消屋敷の同心を務めていた、安藤源右衛門の長男として生まれた。

文化6年(1809)父の死去に伴い、家督を継いで「定火消同心」となった。その後文政6年(1823)家督を嫡子仲次郎にゆずり、定火消同心を退いて、歌川豊広のもとに入門して画業に励み、後に歌川広重と名乗った。

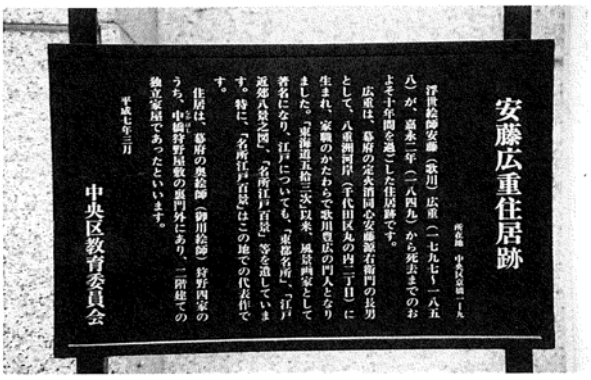
広重は役者絵から出発して、美人画に手を染め、南宗画も学び浮世絵師としての道を歩み、天保4年(1833)今日誰でもが知っている『東海道五拾三次』を発表して、風景画家としての名声を決定的なものとした。

江戸の名所絵としては、『東都名所』『江戸近郊八景之図』『名所江戸百景』がある。

広重は定火消同心でもあったことから、文政2年(1819)年に、江戸消防に関わる絵巻『江戸乃華・2軸』を画き残している。この絵巻は、江戸消防に関する貴重な資料である。

JR東京駅の八重洲口からほど近い所(中央区京橋1～9)に、広重が晩年を過ごしたといわれる、「安藤広重住居跡の銘板(ここで『名所江戸百景』を画いたといわれている。)」が建っている。

安政5年(1857)死去した。享年62歳。



安藤広重住居跡（初代）

(2)2 代広重

2 代広重の父も、初代広重の父と同じように「定火消同心」であった。2 代広重は文政 9 年(1826)に生まれ、初代広重が父の跡を継いで、「定火消同心」となったようなことはしなかった。

2 代広重は、若い頃から初代広重に付いて風景画を習い、初代広重の晩年の名作『名所江戸百景』の製作に加わった。

この他『横浜絵(安政 6 年"1858"に横浜港が開港された後の、横浜の外国人居留地の風俗を扱った絵画)』や、『開化絵(文明開化に関わった洋風建築物や洋風の風俗を描いた絵画)』などを残している。

明治 2 年(1869)に死去。享年 44 歳。

(3)3 代広重

3 代広重の父は船大工で、天保 13 年(1824)に生まれ、明治 27 年(1894)に没した。享年 53 歳。

3 代広重は、初代広重の門人であったが、初代広重がもっていた拝情性とは対照的な画家で、蒸気車、蒸気船、洋風建物など『文明開化絵』を積極的に画いていた。

消防に関わりのある錦絵としては、明治 8 年(1875)1 月 4 日に開催され、今日の消防出初式の前身をなす、「第 1 回東京警視庁消防出初式」を題材とした、『東京名所八代洲町警視庁火消出初階子乗之図』を画いている。

3 代広重の火事に関するエピソードを、5 代広重は次のように語っている。

「同じ火事好きでも 3 代広重は、火事と聞くと刺子を着込んで、火事見舞いを口実に家を飛び出し、帰りは火事装束で吉原に繰り込んで、馴染の花魁に威勢のいいところを、見せるのが得意だった。」と。

(4)4 代広重

4 代広重は、嘉永 2 年(1849)に生まれ、大正 14 年(1925)に没した。享年 76 歳。2 代広重の門人で開化絵などを画いている。

消防に係わる絵としては、火災の発生から鎮火に至るまでの経過を物語り風に、「絵詞折画帳形式(左側のページに、消防制度や火災出場風景・消火活動などに係わる木版画を、右のページには木版画に係わる消防的な解説文という構成で、木版画 20 葉と解説文 20 葉を掲載した)」『江戸の花』という表題の「消防図会」を大正 4 年(1915)に発刊した。

『江戸の花』に掲載された木版画には「近隣発火風上の図」「町火消勢揃いの図」「諸侯御奥立退の図」「町火消弁当送り来るの図」「焼跡板塀仮囲いの図」などがある。

(5)5 代広重

5 代広重は 4 代広重の子で、明治 23 年(1890)に生まれ昭和 43 年(1968)に没した。享年 78 歳。

絵画的作品は、多少あるといわれるが未見。5 代広重の名では、写真集『江戸の今昔』がある。